

HIRAOKA Kazuaki

より良いサッカーの実現に
不可欠な精神

日本らしい素晴らしいサッカーを構築するために何が必要か。もちろん技術や戦術は欠かせませんが、その前にあるべき、また大切にすべき大前提として、人と人の関係があると思いません。チームメイト、対戦相手、そのチームを応援する人々、あるいは指導者やレフェリーなど、サッカーを取り巻く全ての人との関係をスムーズにしようと努めるのに欠かせないのが、他者へのリスペクトなのです。

リスペクトに近いものとしてフェアプレーもありますが、そうした精神がなければ、日本らしい、素晴らしいサッカーは構築できないだろうというのが私の考えです。私の教育理念と指導理念の軸にあるのは、「ビジョン」「ミッション」「パッション」です。それらは、日本サッカー全体のことを考えるときにも、同様に欠かせないと考えていますが、その三つの要素を支えるのも、実はリスペクトの精神性でもあるのです。つまり、リスペクトとは、「より良い日本サッカーの実現に不可欠な精神だ」と、私は定義付けたいと思います。

サッカーを始めたばかりの子どもや若い選手たちに他者へのリスペクトを理解させ、自然な



他者へのリスペクトを
わが振る舞いとして表す

考えとして表現させるのは簡単なことではありません。例えば、試合に負ければ当然悔しい。悔しいから、試合後の相手チームへのあいさつもせずに帰ってしまわれた悔しさから、飲料ボトルを蹴り飛ばしてしまう。悔しさはサッカーがうまくなるため、チームが強くなるためのエネルギーになることは事実ですが、それを表に出さないよう、感情のコントロールができるかどうか。そうした刺激を与えてくれる存在に対して、リスペクトの気持ちを持つことが自分をさらに成長させるんだ、ということを知り、子どもたちが理解できるように、指導者や周りの大人が教えるべきです。



指導者
平岡 和徳
大津高校総監督／
宇城市教育委員会教育長

子どもは大人を見て育つもの

先ほど、リスペクトの精神を子どもたちに教えるのは簡単ではないと言いましたが、手段としては実に簡単です。それは、指導者や大人が実践してみせればよいのです。私を含め、指導者も負ければ当然悔しい。それでも、私は試合後に真剣勝負の場をコントロールしてくれたいレフェリー、自分が指導した選手たちと真剣に渡り合ってくれた相手チームの選手

や監督など一人一人と握手をします。周りで見ている人の中には「あいつ、何かカッコつけているんだ」と思う人がいるかもしれない。自らの感情を抑えて振る舞うことが「カッコをつける」というのであれば、大人はもっとも「カッコをつけるべきでしょう」。

感情に任せて振る舞う大人を見て育った子どもたちがそれと同じように行動するのは当然のことです。子どもは大人を見て育つものという、誰もが理解できる事実をもう一度、世の中の大人たちが理解すべきです。大人が他者をリスペクトする姿を子どもたちの前で見せる。これが「お手本」というものです。

私は指導者であり、教育者です。教育という川には、家庭という源流があります。教育の最初の一滴というのは、家庭の中にある親によって落とされるものです。リスペクトの精神は、「より良い日本サッカー」より良い日本社会、あるいはもっと広い意味で「より良い世界」につながるものです。

サッカーの指導者ではない親御さんでも、リスペクトの精神をわが子に教えることはもちろん可能です。そして、それは決して難しいことではありません。他者へのリスペクトをわが振る舞いとして表す。ただそれを続けていけばいいのだと、私は思います。